

知的障害者の自己決定の選択プロセスの遂行の特徴

—未知課題を題材とした実践を通して—

○今枝 史雄¹⁾

小笠原 拓²⁾

竹井 卓也³⁾

菅野 敦⁴⁾

¹⁾東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 ²⁾株式会社ドコモ・プラスハーティ ³⁾東京都立八王子特別支援学校 ⁴⁾東京学芸大学

KEY WORDS: 知的障害 自己決定 未知課題

I. はじめに

成人期知的障害者の近年のキーワードとして自己決定が挙げられている。木口(2014)は自己決定を行う機会には「日常生活場面」と「契約場面」があることを指摘している。「契約場面」には居住先の選択等が含まれており、未経験、もしくは既有知識の少ない事物・事情の選択をすることが特徴的であると言える。Wehmeyer, M. et al (1996)は自己決定には問題解決能力が関係するとしている。そこで今枝ら(2017)はこれまで提言されてきた自己決定及び問題解決プロセスと知的障害者の学習特性を踏まえ「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を提案した。ここでは、自己決定に含まれる選択行為には選択肢(問題)の理解が必要であり、問題解決能力が関わることを示した。

以上を踏まえ、成人期知的障害者の生涯学習支援の取り組みであるオープンカレッジ東京では、「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を基に講座を開催した。講座では、「契約場面」での自己決定を踏まえ、学習者の既有知識の少ない課題(以下、未知課題)を題材として取り上げた。

本研究では、自己決定の選択プロセスの達成率を基に、成人期知的障害者の未知課題における対象物の選択行為遂行の特徴について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象者:「未知課題」を題材とした講座に参加した成人期知的障害者 22名である。平均 CA32.1歳(±6.8, range20-48)、平均 MA8:01歳(±1:09, range4:11-11:4)であった。**2. 課題:**「一番強いと思う昆虫を選択しよう」という課題で、選択する昆虫は「モンシロチョウ」「トンボ」「バッタ」、観点は「飛ぶ速さ」「飛ぶ時間」「(集団)行動」を設定した。3種の昆虫はいずれかの観点で最も有利になるよう設定した。課題及び選択肢と観点の設定理由は、選択肢に挙げられる昆虫名は知っているが、設定した3観点に関わる知識は有していない可能性が高いと考えたからである。**3. 講座展開:**選択肢である昆虫を、観点を基に説明した後、自己決定の選択プロセスを踏まえ、講座を展開した。今回は全ての選択肢と観点を用いる「等荷重型選択」とした。**1)要素の抽出:**まとめシートを見て、3種の昆虫の要素を書き出した。困難な場合、観点名の挿入された付箋をヒントとして提示した。**2)要素の整理:**抽出した要素をマトリックス表の行ごとに整理した。**3)観点の命名:**要素の内容を基に、行ごとに観点を命名した。困難な場合、観点の書かれた付箋をヒントとして提示した。**4)特定:**観点ごとに要素の順位をつけ、昆虫の特徴をまとめた。**5)妥協点の検討:**観点ごとに順位をつけ(重みを付け)、順位を基に選択肢を得点化した。**6)選択:**得点が最も高かった昆虫を選択した。**7)振り返り:**選択した理由を、観点等を含めて記述することを求めた。困難な場合、優先順位を高くした観点を含め記述するようヒントを提示した。**4. 分析:**プロセス別の達成率を算出した。達成水準は①支援なしで遂行できた場合「達成」、ヒント、またはモデルを提示した場合「ヒント・モデル提示」、「ヒント・モデル提示」と支援者の声掛けが必要だった場合「ヒント・モデル提示+支援」の3水準とした。併せて、最も優先順位を高くした観点の観点別の人数も算出した。

III. 結果

自己決定の選択プロセスのプロセス別の達成率を算出した結果を図1に示す。

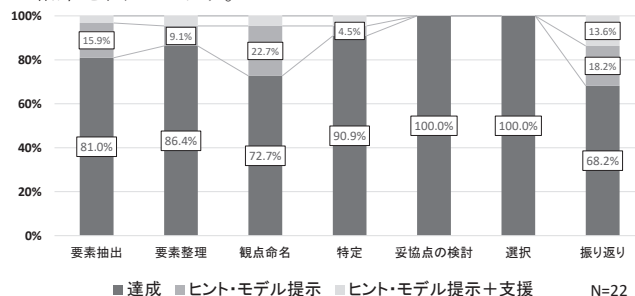


図1 自己決定の選択プロセス プロセス別 達成率

図1より、観点の優先順位を決める「妥協点の検討」や「選択」は対象者全員が「達成」であった。「要素の抽出」は「モンシロチョウ」「トンボ」「バッタ」の順に行い、「モンシロチョウ」では「ヒント・モデル提示+支援」が見られたものの、「トンボ」「バッタ」では「ヒント・モデル提示」のみで達成が可能であった。「観点の命名」は「達成」及び「ヒント・モデル提示」の合計は95.4%であった。選択理由の説明を行う「振り返り」は「ヒント・モデル提示+支援」の割合が、他のプロセスと比較し、最も高かった。

また、最も優先順位を高くした観点の観点別人数を算出したところ、「飛ぶ速さ」8名、「飛ぶ時間」8名、「(集団)行動」6名であった。

IV. 考察

自己決定の選択プロセス別の達成率を算出したところ、「妥協点の検討」及び「選択」は対象者全員が「達成」であった。古屋ら(2004)は自己決定における選択肢の理解には認知能力が関わるとしているが、「観点の重み付け(優先順位の決定)」は「個別の選好」であり、認知能力はそれほど関係しないとしている。今回の結果からも、知的障害者は観点の優先順位の決定には困難性は示さないことが明らかになった。

「要素の抽出」及び「観点の命名」では観点をヒントとして提示すれば、多くの対象者が要素を正しく抽出したり、要素間の共通点に気づき整理したりすることができた。今枝ら(2016)は知的障害者の問題解決に関わる知的機能の特徴として、二つ以上の選択肢を比較する際、自ら観点を抽出することが困難としている。しかし、比較する観点を提示することによって、知的障害者でも論理的な操作の含まれる選択プロセスにも取り組めることが明らかとなった。

選択理由の説明を行う「振り返り」では「ヒント・モデル提示」から、さらに支援を必要とした対象者が多かった。観点の提示以外の方法の検討が必要であろう。

V. 今後の課題

未知課題と違い、自己決定に関わる日常生活課題は選択肢の理解の前に、置かれた状況を問題として把握する「問題の発見」が必要となる。今後は「問題の発見」をどのように学習課題に位置づけるか検討が必要である。

(IMAEDA Fumio, OGASAWARA Taku, TAKEI Takuya, KANNO Atsushi)